〔土左日記〕廿七日、〇承平四年十二月かこの崎といふ所に、守のはらから、またこと人これかれ、酒などもて追ひ來て、磯におりゐて、わかれがたきことをいふ、〇略中折ふしにつけて、からの歌ども、時に似つかはしきをいふ、又ある人、西の國なれど、甲斐歌などうたふ、かくうたふに、ふなやかたの塵もちり、そら行雲もたゞよひぬとぞいふなる、〇略中元日、〇承平五年正月なほ同じとまりなり、白散をあるもの、夜の間とて、舟やかたにさしはさめりければ、風に吹ならされて、海にいれて、えのまずなりぬ、

〔兵範記〕保元三年十月十七日癸卯、午刻關白殿、〇藤原忠通令參平等院給云々、〇略中下北面船一艘　高屋形造之、葺松葉、　船差六人　例裝束　件高屋形、寺家艤之、

〔源平盛衰記三十三〕平家大宰府落幷平氏宇佐宮歌附清經入海事

左中將清經ハ、船屋形ノ上ニ上リッヽ、東西南北見渡シテ、〇略中閑ニ念佛申ッヽ、波ノ底ニゾ沈ケル、

〔源平盛衰記四十三〕源平侍遠矢附成良返忠事

黑塗ノ箭ノ、十四束ナルヲ、只今漆ヲチト削ノケ、新居紀四郎宗長ト書附テ、舳屋形ノ前ホバシラノ下ニ立テ、暫固テ兵ト放ッ、

〔太平記二〕長崎新左衞門尉意見事附阿新殿事

船人、〇略中手々ニ船ヲ漕モドス、汀近ク成ケレバ、船頭船ヨリ飛下テ、兒〇日野阿新ヲ肩ニノセ、山臥ノ手ヲ引テ、屋形ニ入タレバ、風ハ又元ノ如ニ直リテ、船ハ湊ヲ出ニケル、

〔太平記七〕先帝船上臨幸事

此道ノ案內者仕タル男、甲斐々々敷、湊中ヲ走廻、伯耆國ヘ漕モドル商人船ノ有ケルヲ、兎角語ヒテ、主上〇後醍醐ヲ屋形ノ內ニ乘セ進セ、其後暇申テゾ止リケル、

〔八雲御抄三枝葉〕雜物部附調度

にくさび